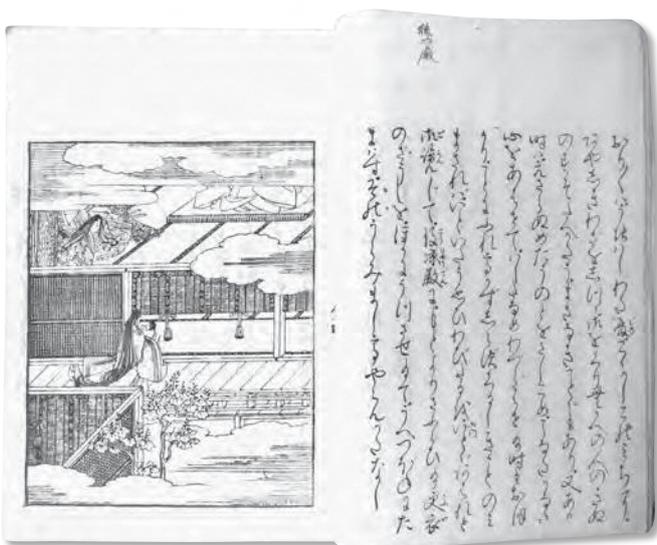


源氏物語と江戸時代の書籍出版

『絵入源氏物語』と山本春正

日本古典文学の金字塔として知られる『源氏物語』が、広く一般大衆に読まれるようになったのは、江戸時代の代りです。

市内在住の方の家に伝わった『承応版源氏物語』は、通称『絵入源氏物語』と呼ばれる江戸時代初期の版本（木版で刷られた本）です。本編54巻と、付録の解説書を加えた全60巻が



『承応版源氏物語』第一巻「桐壺」より（高島市所蔵）

そろつのは、国内でも珍しいと言われています。江戸時代初期屈指の時給師として知られ、歌人でもあった山本春正（1610～1682）の編集で、慶安3年（1650）に初版が刊行されました。初心者でも読みやすいように、本文に初めて注釈や読み点、濁点、振り仮名が加えられ、合計226枚の挿絵が添えられています。

本書の登場で、それまで一般的に梗概書（ダイジェスト版）で読まれていた『源氏物語』を、多くの人が全編を通して楽しむことができるようになりました。

書籍出版の歴史

それまで日本での書籍出版は、主に寺院や為政者・権力者とその周辺で行われていました。江戸時代初頭の寛永年間（1624～1644）に

京都で商業目的の民間出版がさかんになり、出版・印刷・販売を一手に扱う「書肆（本屋）」が確立すると、大坂・江戸へ市場が拡大しました。また大量印刷が容易な木版による版本の出版が主流となり、本屋を通じてさまざまなジャンルの書籍が流通し、書籍出版は文化的経済活動の一大産業として隆盛を極めました。



正保4年刊本『鑑草』（藤樹書院所蔵）

本屋と中江藤樹

本屋にまつわるエピソードとして、高島出身の儒学者・中江藤樹の逸話が残されています。ある日、執筆中の著作『翁問答』の内容が流出し、京都の本屋が無断出版しようとしているのを知った藤樹は、それを引き留めました。このままでは大きな損害になってしまおうという本屋の訴えに、藤樹は『鑑草』の原稿を別途執筆して与え、正保4年（1647）に版本が刊行されたと伝わっています。

岡文化財課 ☎（25）8559

編集感

今号の表紙と特集1は「二十歳のつどい」です。私は会場で写真撮影をしていましたが、多くの笑顔や晴れやかな姿に元気を感じた気がします。今年の二十歳の皆さんは高島市と同じ年。というご縁から、実行委員の方々には1月号の市制20周年特集でもご協力いただき、個人的に非常に思い入れのあるつどいとなりました。二十歳の皆さん、改めておめでとうございます。これからの人生に幸あれ！（S）



広報たかしま

令和7年

2

月号

No.301

発行▼高島市 編集▼政策部企画広報課
滋賀県高島市新旭町北畑の町番地

0740(25)8000(代)
https://www.city.takashima.lg.jp
t:info@city.takashima.lg.jp